最近の考古学調査から

戦後、大分県の考古学研究は、他県にさきがけて行われた。その中で佐伯市下城、長良貝塚の発掘は、暗い昭和二十三年六月と十一月の二度にわたつて実施された。この調査では所謂下城式土器の出現、鉄製遺物を多量出土した製鉄場の発見など、わが国製鉄文化の起源に重要な問題提起をなした。この調査と前後して、国東町安国寺弥生式遺跡の調査が行われた。昭和二十四年二月基礎調査を実施、その調査成果が九州文化綜合研究所の調査へと進展し、ここに西南日本における弥生式後期の水田遺跡の最大規模発掘が実施された。この調査の終了時近く速見郡早水台遺跡の話題がでてきた。別府湾にのぞむ、海岸段丘上の数町歩にわたつて縄文早期の土器が散布し、日本で早期遺跡最大の規模と伝えられた。当時大分師範学校歴史学研究室の試掘によつて、この遺跡の重要性が更に明確となり、昭和二十八年の学術調査えと発展した。

宇佐神宮境域にある広大な弥勒寺趾の調査も、戦後特筆すべきものであつた。多数の古文書、古記録によつて伽藍の規模、創建、修復などの考証を発掘によつて確実なものとする。歴史考古学上重要な遺跡であつた。調査は六年間を要し、東塔趾や金堂などの完全発掘が行われた。流麗な法隆寺式忍冬唐草文軒平瓦は、二十九年度駅川町山本虚空蔵寺趾の発掘によつて多数の塼仏と共に出土した同式古瓦の祖形式に珠文周辺をもつた華麗なものとして、弥勒寺創建時に使用された。中心飾の左右に広がる均正唐草文の外周を珠文例で飾るこの技法は、弥勒寺特有のもので弥勒寺瓦と呼んだ。

戦後久しく、ようやく安定した社会が訪れると、学問も非常に進歩の速度を増した。縄文晩期稲作到来説、大陸製遺物の出土による大陸との比較考察、旧石器文化に対する論争など、興味深い問題が提起されて学会の焦点は、問題意識によつて研究が進められる段階になつた。洞穴遺跡がその性質と層位調査に便利であるところから、層位によつて編年を再考する立場で研究会が組織された。日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会は三十七年以降、長崎県福井洞穴、大分県佐伯市郊外聖獄洞穴、同

速見郡山香町川原田洞穴、同大野郡朝地町大恩寺、草木洞穴、愛媛県上黒岩洞穴など重要遺跡の調査を行い、それぞれ重要な問題を提起してきた。そのような学会の一翼として大分県各地の遺跡がしばしば話題にのぼる。いずれ詳報の必要はあるが、とりあえず重要な遺跡について、概報を行うことにした。これら遺跡発掘は別府大学文学部の主力で実施したため、本稿を特集として別府大学考古学研究室において執筆する便宜をあたえられたことを深く感謝する。執筆者は左の如くである。

聖獄洞穴遺跡	後藤重己	講師
川原田洞穴遺跡	岩尾松美 酒勾勢明	嘱託 史学科学生
大恩寺洞穴遺跡	羽田野一郎 坂田邦洋	大恩寺中学教諭 史学科学生
小池原貝塚	賀川光夫	教授
草木洞穴遺跡	鈴木重治 鳥養孝好	講師 大野高校教諭
大石遺跡	賀川光夫 阿南一郎 富来雅勝	教授 緒方中学教諭 史学科学生

なお、本概報はいまだ詳細な研究未了なものが多く、今後資料の整備と共に再度の報告をこころみ度い。特に聖獄人骨は新潟大学教授小片保氏を通じて東京大学において弗素の検出を、大恩寺洞穴や川原洞穴の放射性炭素の測定は東京教育大学教授八幡一郎氏を通じて英国大英博物館放射性炭素研究室にて調査中である。絶対年代を把握してそれぞれ層位を異にした人骨の研究が完成すれば、わが国人類の発達を編年的に正確な結果を得ることになる。この点を大いに期待している。本稿はその意味で不充分なものばかりであるが、研究途上のものと考えていただきたい。

昭和三十九年二月

考古学研究室　賀川光夫